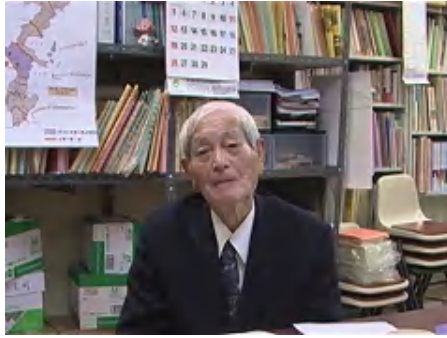


福地曠昭さん

1931(昭和6)年2月28日生まれ
沖縄県大宜味村字喜如嘉
民間人

所属 喜如嘉国民学校高等科2年

戦地 大宜味村喜如嘉(きじよか)



●1944(昭和19)年 戦争に備えて

喜如嘉(きじよか)は県内でも有名な翼賛部落だった。戦争が始まったころは毎日のように赤飯を炊いていた。体育の時間はルーズベルト・蒋介石等の名前を書いた藁人形を突く。小学生は木銃を持って射撃演習。青年学校は本当の銃を使っていた(実弾は入れない)。このころは標準語励行。喜如嘉は方言札(方言を使うと罰として首にかけられる札)はなかったが、部落の罰金と学校の罰金があった。日中戦争のころから頻りに村葬があった。

陣地構築のための坑木、燃料の炭焼き。炭焼き部隊、炭焼き小屋があった。中南部から舟艇が来て、材木の伐採部隊が編制された。やんばる船で本船に運んだ。三高女の女学生が炭焼き小屋で給仕をしていた。

喜如嘉で朝鮮人の軍夫を見たのは、今生きている人では私しかいない。酷使されている状況は気の毒だった。3~4名。体が大きくて、大きな材木や炭の運搬をしていた。すごい力持ちだなあと見ていた。

このころは兵隊はご飯をわけてくれたり、病気をすると軍医が薬をくれたりと親切だった。

●1945(昭和20)年4月6日 特攻隊の遺体を埋葬

寺内中尉の特攻隊。喜如嘉の浜に、死体が漂流してきた。軍服を着ていて、大きくなっていて。体が大きいので、はじめ米兵だ、敵が流れ着いたと村の人が集まったが、大きくなっていてのは死んで水膨れをしていたためだった。ちゃんと日の丸のハチマキをしていたので、これは特攻隊だと言って葬った。伊平屋海戦というのがあったので、喜如嘉と伊平屋の間で戦って沈められたのだと思う。

●1945(昭和20)年3月26日~4月 米軍が入って来て山中生活へ

3月23日は卒業式の予定だったができなかった。

海は米軍の軍艦でまっ黒。体の大きいのはご真影班といって、教育勅語を避難させる。私は体が小さかったから、「空襲警報～」と山之上から部落民に知らせる。山の上から見ていた。

ちっぽけなガリ版新聞で、米軍がもう上陸したというのを知って、沖縄の人たちはみんな山奥に避難した。中南部から来た人は当山、私たち地元のものはもっと里の方だった。

叔父さんが、防衛隊帰りでカーキの服を着て竹槍を持っていたので、兵隊と思われて米軍に銃剣で殺された。炭焼き小屋のそばの川のところに血がいっぱいして死体の悪臭が今でも鼻についている。死体を見るのは初めてで、それも自分の叔父さんだったので、本当に戦争とはこんなものかと怖くなった。同じころ、村の警防団の人も殺された。喜如嘉にはそのころまでは兵隊もいないし陣地もないのに。

便所や山羊小屋まで避難民の家だった。小学生は避難民に食糧を配る。女生徒はおにぎり、私たちはお箸。公用米を各部落で区長が預かっていた。避難民にだけやっていた。我々は芋しか食べていないころ、一時期は避難民がうらやましかったが、後は逆になった。山にいるから塩が一番なかった。夜陰に乗じて喜如嘉の浜に降りて潮を汲んで来て家で塩を炊いた。ハブやセミはいい栄養だった。ネズミは高級料理だった。ヤンバルクイナのような鳥など、それをとるのが子供の仕事だった。イグサを芯にしたろうそくが重宝した。避難民よりはずっと恵まれていた。

●1945(昭和20)年7月15日 山を下りる

戦争がいつ終わったのかはわからない。あと1週間分しか食糧がなかった。紫雲隊というのが部落全体を管轄していた。部落の幹部が、このままでは部落みんな餓死するからと、紫雲隊の方をお願いに行った。下山許可が出た。田井等収容所にはすでにたくさん収容されていた。木の棒に白い布をつけて旗にして、部落の人が持って下りた。米軍のレーションをもらって落ち着いた。

兵隊は屋嘉(やか)収容所に送られる。日本兵が琉装(沖縄の伝統的衣装)をして下りてくることがあるが、沖縄の人に方言で質問されて答えられず屋嘉収容所に連れて行かれる。米軍に収容されてからは、部落のメーヤー(長)の小遣いをしていたので、そういうのを全部見ていた。

(取材日:2012年2月5日)